「自分の時間」の充実と自己理解及びアイデンティティの関係

ープライベート空間の視点からー

○橋本 巖¹・鈴木綾菜² (非会員)

(¹愛媛大学大学院教育学研究科・²(株)もみじ銀行)

キーワード: プライベート空間, 自己理解, アイデンティティ

Psychological Function of Private Space for Self-Understanding and Identity Development in University Students

Iwao HASHIMOTO¹, Ayana SUZUKI^{2,*}

(¹Graduate School of Education, Ehime Univ., ²Momiji Bank, Ltd)

Key Words: private space, adolescents' reflection for self-understanding, identity development

目 的

プライバシーが確保され自由に振る舞える「自分の時間」は重要であり、しばしば「一人で過ごす」と見做されがちである。一方、生涯発達の見るとき、ひとりであることは、孤独(孤立)と不安を意味したり、偏見を向けられる可能性さえある。このような空間的・社会的形態面から自分の時間を捉えるのではなく、本研究では、形態は多様でも本人にとって「社会的役割から離れて、他者の目を気にせずに自由に振る舞える自分固有の領域(時間や空間)」が存在することに着目した泊・吉田(1998)の「プライベート空間」の概念を援用して、大学生にとっての「自分の時間」の機能とその発達の意味について考えたい。具体的には、大学生は自己形成期である青年期にあることから、プライベート空間の機能に含まれる「自分を見つめ、課題へ没頭すること」により主体性や自己への信頼が形成されたり、親密な人と過ごし、自分を開放することで「自分らしさ」の感覚を得るなど、「アイデンティティ形成」とのつながりが推測される。また、自己形成の課題を意識する際に、自己を理解しようとして考えることを本研究では「自己理解」と呼び、「自分の時間」(つまりプライベート空間)の必要度および確保度の相違との関連にも着目して調査・分析を試みた。

方 法

- 1.調査参加者 愛媛県を中心とした複数大学の大学生 355 名 (男性 139 名, 女性 216 名, 平均年齢 19.15 歳, 有効回答率 87.4%)
- 2.調査時期 2015 年 10 月～11 月
- 3.手続き 辞退の自由等を含む倫理的事項について説明の後、「自分のための時間・空間に関する調査」と題した無記名式の質問紙を配付・実施した(大学の講義機会および個人への依頼)。所要時間は 10～15 分であった。
- 4.質問紙の構成 (1)プライベート空間機能尺度:「自分の時間」の測度として、泊・吉田(1999)が作成したプライベート空間機能尺度(7 項目版)を使用した。「専有できる空間(緊張解消, 自己内省, 課題への集中)」,「共有できる空間(率直なコミュニケーション)」,「自己解放できる空間(気分転換, 情緒的解放, 自己変身)」の 3 空間 7 機能で構造化されている。7 項目からなり, 必要度は 1～7 の 7 件法。確保度は, 1～4 の 4 件法。また本研究では, 「自分の時間」を必要とした人において, その人が確保できている程度を 3 つの空間ごとに, 総合的に「充実度」と呼び測度化した (Level1; 非常に充実～Level4; 充実していない)。(2)独居肯定尺度: ひとりであることへの志向・肯定性を見る尺度。9 項目 1 因子 ($\alpha=.83$) を使用。5 件法 (独居に関する予備的研究より)。(3)自己理解尺度 予備的研究より, 「ひとりで過ごしている時間に, 自分について問い, 考えるプロセス」を自己理解と見なして質問。5 件法。予備的分析 (因子分析) より, 因子 1「これからの将来展望思考」(6 項目, $\alpha=.89$), 因子 2「現在の自

分についての他者・自己比較思考」($\alpha=.83$), 因子 3「日常生活の予定や振り返りに関する短期的思考」(4 項目, $\alpha=.63$) とした。(4)アイデンティティ尺度 下山(1992)が作成したアイデンティティ尺度を使用した。自分の安定感に関わる「アイデンティティの基礎」(10 項目, $\alpha=.83$), 「アイデンティティの確立」(10 項目, $\alpha=.82$) の 20 項目。1～4 の 4 件法。

結果及び考察

1 大学生の「自分の時間」に関する実態 プライベート空間尺度の平均値は, 必要度 (7 件法) は「専有できる空間」, 「共有できる空間」, 「自己解放できる空間」のいずれでも「非常に必要」と感じられている。さらに, 「自分の時間」と独居肯定尺度の相関係数を分析した結果, ひとりでいることに肯定的な人は, 「専有できる空間」と「自己解放できる空間」の必要度が高いことが示された。一方, 確保度 (4 件法) は 3 空間いずれも「どちらかという確保」が多く, 満足に確保できていないと感じていると思われた。

2. 「自分の時間」必要度及び充実度と自己理解との関係 プライベート空間尺度 3 空間の必要度と自己理解尺度 3 因子の相関係数は, どの因子でも有意な正相関 (.16～.34) が見られたため, 「自分の時間」必要度高群, 低群による自己理解各尺度得点の差を分析した結果, いずれの自己理解尺度得点でも, 各空間の必要度高群 > 低群となった。しかし, 自分の時間「充実度」の 4 水準による自己理解尺度得点の差については, 「専有できる空間」, 「自己解放できる空間」では充実度により自己理解に一貫した差が見出されなかった。「自分の時間」を必要と感じること自体が, 「自分」について問い, 考えさせると示唆された。

3. 「自分の時間」確保度及び充実度とアイデンティティとの関係

「自分の時間」3 空間の確保度とアイデンティティの基礎及び確立の相関分析より, 有意な正の相関 (.16～.29) が見られた。そこで 「充実度」4 水準によるアイデンティティ各尺度の有意差を分析した結果, (1)アイデンティティの基礎では, 「専有できる空間」, 「共有できる空間」, 「自己解放できる空間」のどの空間でも, Level1>Level4 となった。(2)アイデンティティの確立では, 「専有できる空間」, 「自己解放できる空間」において Level1>Level4 となった。「共有できる空間」の充実度によってアイデンティティの「確立」の有意差が示されなかったことから, 「共有できる空間」のような他者からの受容, 支えを感じられる時間が自己の安定に, 「専有できる空間」や「自己解放できる空間」のような「自分らしさ」の独自性や固有性を実感できる時間が自己の確立につながっているという意味合いの相違について検討すべきと思われる。(補足: 「アイデンティティと自己理解の関連」の分析では, 自己理解の「将来展望思考」では, アイデンティティの確立高群 > 低群となる一方, 「他者自己比較思考」では, アイデンティティの基礎低群 > 高群という有意差が示されている)。